

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 9 月 1 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24520247

研究課題名(和文) 放鷹文化と鷹書類の研究

研究課題名(英文) The study of the culture of falconry and the literature of falconry

研究代表者

中本 大 (NAKAMOTO, Dai)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：70273555

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：わが国において、鷹狩りの実技がもっとも盛んに行われた中世から近世(12C～19C)において成立した鷹書の調査に取り組んだ。この時期の鷹狩りは、もっぱら武家によって実践されており、その主要な担い手として、将軍家や各地の大家に仕えた鷹匠たちの存在が重要である。本研究では、そのような鷹匠の末裔諸家に伝来した書類を取り上げ、その叙述内容の検討を通して当時の鷹狩りに関する新たな知見を得た。さらには、その成果を踏まえて、武家流放鷹文化の実相を明らかにすると同時に、それに伴う鷹書研究の適正な手法をある程度確立することができた。

研究成果の概要(英文)：We conducted research on the study of falconry established in the medieval-early modern period (12C-19C) when the practice of falconry flourished the most in our country. Falconry in this period was practiced solely by the samurai and the key figures were falconers who served the shogunate families or families positioned to accede to the shogunate and the daimyo (large, prestigious) families of various regions. In this study, we consider various types of texts introduced by the descendants of these falconers and obtain new information about falconry at that time by examining the content of these descriptions. Further, based on the results, we were also able to identify the real state of affairs of samurai-style falconry culture as well as establish, to some extent, appropriate methods for the study of falconry associated with it.

研究分野：日本文学

キーワード：鷹 鷹匠 鷹書 流派

## 1. 研究開始当初の背景

わが国において、鷹狩りの実技がもっとも盛んに行われたのは、中世から近世にかけてである。この時期の鷹狩りは、もっぱら武家によって実践され、その主要な担い手として、将軍家や各地の大家に仕えた鷹匠たちを挙げることができる。日本における鷹狩は古墳時代から始まったことが出土品などから確認されるが、古代の鷹狩りは、もっぱら天皇が行っていたものであった。さらに、平安時代になると、貴族もそれに準じて鷹を扱うようになった。このような歴史的経緯から、これまでの放鷹文化に関する研究では、天皇家・公家の鷹狩りと将軍家・武家の鷹狩りを混同して取り扱われることが多かった。

このような研究状況に対して、本研究の前身である科学研究費補助金「鷹書類の調査と研究」(基盤研究(C)、研究課題番号 20520189、2008年～2011年)において、鷹狩りの伝書である鷹書類の研究を進めるうち、天皇・公家が行う権力の示威行為としての鷹狩りと、将軍・武家が行う教養的要素の強い鷹狩りとでは、まったく異質な文化事象を伴うことを明らかにした。その具体的な研究成果については、二本松泰子『中世鷹書の文化伝承』(三弥井書店、2011年2月)にまとめて公刊した。

そのような状況を踏まえて、本研究では、中世～近世期において成立・流布した鷹書類のうち、武家の鷹匠所縁のテキストを中心に上げて考察を進めていくこととした。ただし、諸機関に所蔵されている鷹書群の多くは、無作為に集められたものであるため(三保忠夫、『鷹書の研究 宮内庁書陵部蔵本を中心に』、和泉書院、2016年3月など)、放鷹文化の実相を探るのにふさわしいテキストを慎重に選ぶ必要が生じ、結果、各地に埋もれている鷹匠の末裔に伝来している新出の鷹書を中心に調査を進めてゆくこととなった。

## 2. 研究の目的

わが国の長きにわたる鷹狩りの歴史に関する従来の研究は、たとえば、近世の幕藩体制における「鷹場」についてなど、主に社会史や制度史の視点からのみ論じられ、鷹狩りそのものを文化として捉える取り組みはほとんどなされてこなかった。そうした状況において、本研究では、鷹狩りを「社会制度」ではなく「文化」そのものと看做す立場から、「鷹書」という鷹狩りに関連する伝書群を研究対象として取り上げることにより、放鷹文化研究の新しい手法を確立することを目指した。

ところで、実は近年、鷹書の研究は注目され、相応に研究が進められつつある。それは、当該のテキスト群が、わが国における放鷹文化史の実相を解き明かす有益な手掛かりとして認められてきた所以であろう。しかしながら、先述したように、天皇家・公家・将軍家・武家の鷹狩りの文化位相を混同して捉える見解が未だ多くを占め、正確な分別をしな

いまま鷹書を扱う手法が是正されていないケースが多い。また、鷹書のテキストは無名のものが多いことから、それを扱う際に書誌学の域を出ない論考に終始していることも鷹書研究の適正化を妨げている大きな要因であろう。また、実際に鷹狩りには従事していない礼法家などに伝来したテキストは、二次資料にすぎない(二本松泰子「近世期における小笠原流礼法の展開 水嶋派の鷹書を端緒として」、『信濃(第三次)』67巻12号、2015年12月)。それにも関わらず、鷹と鷹狩りに関する文言が見えるという理由だけで、すべてを同じ「鷹書」と等質視して研究対象とする手法は適正とは言えない。なお、そのようなテキストの代表的な例と言えるのは、鷹百首類などの鷹和歌集であろう。当該テキスト類の制作者は決して鷹匠ではなく、そもそも鷹狩りに従事した人物であるかどうか不明である。さらに、各地の鷹匠たちに伝来したテキスト群にそれらが含まれるケースも極めて稀である。そのため、鷹和歌集を以て放鷹文化を反映した文物とみなすことには慎重を期さねばならない。いわゆる鷹詞の用例が多いテキストであることと鷹狩りにまつわる文事的な書物であることとは別次元で捉えねばならないものであろう。

そこで、本研究では、先述のように鷹匠所縁であることが確認できる鷹書のみを扱い、書誌学にとどまらずにその内容にまで踏み込んだ調査方法の確立を目指した。該当するテキストの多くは、中世～近世期に活動した武家の鷹匠に伝来したものである。そのようなテキスト類を所持した鷹匠たちについても、その事績を併せて調査し、テキストとの相関関係を通じて当時の放鷹文化の実相解明を試みた。それによって、適正な放鷹文化研究の手法を明確にすることを期した次第である。

## 3. 研究の方法

まず、かつて全国に存在した鷹匠たちの所在確認からはじめて、現存するその末裔の家に伝わるテキストについて調査を進めた。その結果、個人蔵のものを含む新出の鷹書が相当数発見された。これらについて、すべてをデジタルデータ化した上で、基礎作業としての書誌データの整理を行った。さらに、その叙述内容の中から、説話的な部分を中心に取り上げ、その伝承的位相を考察した。

また、鷹匠の家に伝来した文書類には、鷹書以外のものも多く確認されることから、それらについても叙述内容を分析し、鷹書の周縁的な文物としての意義を検証した。さらに、そのような鷹匠文書を所持した意義についても考察を進め、鷹匠たちの史実上の事績と併せて彼らの文事活動としての側面についても検討した。

さらに、新出資料として発見したテキストのうち、主に近世期に諸藩に仕えた鷹匠に伝来したものは、いずれも何等かの流派を称し

ている。当時の鷹匠たちは、個々に“流派”を確立し、それに伴う独自の放鷹文化を展開していたのである。そのような鷹術流派についても、彼らに伝来した鷹書の叙述内容を手掛かりにして、その成立および流布にまつわる文化的諸相を検証した。

#### 4. 研究成果

以下の(1)～(4)に挙げる個々の事例の検証を通して、本研究の目的に応じた成果を得ることができた。

(1)中世以降の鷹匠が、自身を祖とする鷹術流派を確立する経緯を検証するため、室町時代の東国武士である児玉経平の活動に注目した。経平は「関東鎌倉殿」の「御内三家」を自称する鷹匠とされる。彼が制作・書写したとされる国立公文書館内閣文庫蔵『鷹繪圖之書 児玉玄蕃佐』、立命館大学図書館西園寺文庫蔵『政頼流秘書鷹りやう治次第』、神宮文庫蔵『鷹之葉方』、天理大学附属天理図書館蔵『鷹書』、宮内庁書陵部蔵『政頼流鷹詞 全』に注目し、それらに記載されている鷹の伝來說話の生成過程を検証した。それによって、経平は各地を巡回しながら在地に応じた独自の当談話を創作し、それを記載したテキストの伝授を通して「児玉流」を確立したことが判明した。

(2)中近世期における日韓放鷹文化交流の実相を明らかにする一端として、近世初期にわが国に伝来した朝鮮の鷹書である李瑢編『古本鷹鶴方』(15世紀成立)の享受の実態に注目した。わが国で最も流布した朝鮮の鷹書は、李瑢編とされる『新增鷹鶴方』(16世紀成立)である。同書は、近世初期に林羅山が朝鮮通信使から貸与されたものを書写して以来、版本や国字解が制作され、テキストが一気に広まった。一方で、李瑢編『古本鷹鶴方』は、わが国ではあまり知られていない。現存する伝本としては、韓国国立中央図書館蔵、宮内庁書陵部蔵、国立公文書館内閣文庫蔵の三本が確認できる。そのうち、韓国国立中央図書館蔵の奥書に見える伝来の系譜手掛かりにして、近世初期に公儀鷹匠であった山本盛丘から一定の弟子筋にのみ伝来して拡散されなかったことを検証した。そのことによって、鷹匠たちが独自のコミュニティにおいて一種の流派のようなものを形成していたことを明らかにした。また、朝鮮最古の鷹書である韓国国立中央図書館蔵『高麗古本鷹鶴方』(李兆年編)についても、その本文を精査して、同本が日本に伝来しなかった要因について考察した。

(3)中世後期以降、武家の間で最も隆盛した祢津(家)流の鷹術について、その流布の諸相を明らかにした。祢津氏には、真田信之に仕えて以降、代々松代藩士であった本家と、上州豊岡に居を移した祢津松鶴軒信政を祖とする分家が有名で、両家とも鷹匠として活動していた。本家には、根津志摩(幸直)所縁の宮内庁書陵部蔵『根津志摩守ト有之鷹書』をはじめ、真田宝物館に寄託されている祢津家文書の中に5点ほど伝来の鷹書が確認できる。本家は代々松代藩士として、藩主の鷹狩り業務に従事していたが、当家の鷹術を流

派として広めていたが、根津家は頼れない。祢津家(流)として著名なのは、むしろ分家の方の祢津松鶴軒所縁の流派であった。というのも、松鶴軒は徳川家康に仕えた鷹匠として知られることから、彼の鷹術は“將軍家の鷹術”としてブランド化したのである。その結果、彼から伝授されたとする鷹書が全国で大量に流布することとなり、武家の間で当該流派が隆盛した。その一事例として、近世期に加賀藩に仕えた依田氏が祢津家(流)の鷹匠であることを主張した経緯について注目し、当家伝来の新出の鷹書および鷹文書について検証した。当家は、松鶴軒の娘婿となった守廣が、松鶴軒から直接鷹術を伝授されて以来、代々祢津(家)流の鷹匠となったという。しかし、百点以上におよぶ当該のテキスト群には、たとえば、祢津(家)流を称する犬牽の伝書も含まれていて、明らかに実際の祢津家の鷹術と乖離した伝承を有していたことが窺える。また、依田氏が発行した祢津(家)流の鷹術の印可状や犬牽の印可状には、祢津家における伝説の鷹匠である神平貞直からの伝授の系統が一樣に記載されているが、それは、依田氏伝来の鷹書に見える鷹および犬の伝來說話を踏まえた内容であった。なお、当該説話の多くは、祢津家の鷹術を称賛するモチーフとなっていて、祢津(家)流の鷹匠が独自に創作したと推測されるものである。祢津(家)流の鷹匠を主張していた依田氏は、こういった文書類を媒体に当該流派の鷹術を広く発信していたことが確認できるものである。

(4)中近世期における礼法家の名前を冠した鷹術流派について、当該流派に属する鷹書類を調査してその実相を明らかにした。たとえば、小笠原長時直伝を称する小笠原流の鷹書や徳川幕府の高家を務めた吉良家の名を冠する吉良流の鷹書などについてその内容を精査したところ、それらはいずれも、他流派の鷹書の内容をほぼ丸引きしているなど、鷹術の実態を伴わないものであることが判明した。このことから、鷹狩りの実技と乖離した環境において成立・流布した鷹書類は、当時の放鷹文化を反映したのとは言い難く、二次的な面直ししかないとが明確になった。

以上の成果については、二本松泰子の単著として、『鷹書と鷹術流派の系譜』にまとめて2017年度中に三弥井書店から刊行する予定である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者および研究分担者は下線)

〔雑誌論文〕(計15件)

山本一、鷹書文献序説 富山市立図書館  
山田孝雄文庫蔵本の検討、金沢大学人間社会研究域学校教育系紀要、9、査読無、pp.65-76、2017年

URL: <http://hdl.handle.net/2297/47022>

二本松泰子、祢津家の犬牽伝承 加賀藩・依田氏の伝書をめぐって、伝承文

学研究、65、査読有、pp.22 - 47、2016年

二本松泰子、近世期における鷹匠の文化伝承 依田氏の鷹書を端緒として、長野県短期大学紀要、71、査読有、pp.123 - 136、2016年

山本一、鷹書に現れる人々 「(徳丸)宗養奥書本鷹書」の固有名詞、金沢大学人間社会研究域学校教育系紀要、8、査読有、pp.123-128、2016年

URL: <http://hdl.handle.net/2297/44775>

山本一、京都府立総合資料館蔵の信州須坂藩旧蔵鷹書、北陸古典研究、31、査読無、pp.23 - 26、2016年

二本松泰子、近世期における小笠原流礼法の展開 水嶋派の鷹書を端緒として、信濃、67巻12号、査読有、pp.49-70、2015年

山本一、鷹書と鷹歌、中世文学、60、査読有、pp.42-49、2015年

山本一、国立公文書館内閣文庫蔵「宗養奥書本鷹書」(仮称)をめぐって 戦国末期但馬と鷹書 -、金沢大学人間社会研究域学校教育系紀要、7、査読無、pp.173-182、2015年

URL: <http://hdl.handle.net/2297/41677>

二本松泰子、近世における動物(鷹)飼育のマニュアル 新出資料の鷹書紹介、ピオストーリー、第22巻、査読有、pp.78-87、2014年

山本一、松平文庫蔵(福井県立図書館保管)「鷹ノ書」の研究と翻刻、金沢大学人間社会研究域学校教育系紀要、6、査読無、pp.157-168、2014年

URL: <http://hdl.handle.net/2297/39158>

二本松泰子、韓国国立中央図書館蔵『鷹鵠方全』(古古7-30-44)全文翻刻、日本語・日本文化、第39号、査読無、pp.21 - 51、2013年

二本松泰子、宮内庁書陵部蔵『鷹間書 諏訪家傳 完』(函号163-1061)について、研究紀要(長野県国語国文学会)、第10号、査読有、pp.1 - 8、2013年

二本松泰子、諏訪貞通の鷹書 - 諏訪信仰の記述をめぐって -、國學院雑誌、第114巻第11号、査読有、pp.426-443、2013年

中澤克昭、公家の「鷹の家」を探る、日

本歴史、第773号、査読有、pp.85-94、2012年

二本松泰子、京都諏訪氏の鷹書 天理大学附属天理図書館蔵『鷹間書少々』全文翻刻、長野県短期大学紀要、第67号、査読無、pp.115 - 125、2012年

[学会発表](計2件)

山本一、鷹書と鷹歌、中世文学会平成26(2014)年度秋季大会(招待講演)、於:金沢市文化ホール(石川県金沢市)、2014年10月4日

二本松泰子、日韓放鷹文化交流に関する一考案 韓国国立中央図書館蔵「鷹鵠方全」(古古7-30-44)をめぐって(さくら基金研究発表)、生き物文化誌学会第11回学術大会東京大会、於:星薬科大学(東京都品川区)、2013年7月7日

[図書](計2件)

福田晃・金賛會・百田弥栄子編、福田晃・金賛會・百田弥栄子・藤井佐美・馬場英子・松本孝三・渡辺伸夫・ハルミルザエヴァ・サイダ共著、伝承文学比較双書『鷹と鍛冶の文化を拓く 百合若大臣』、428(pp.94-126、232-265、358-375)、韓国の「百合若大臣」の伝承資料、三弥井書店、2015年  
藤原良章編、八重樫忠郎・落合義明・真鍋淳哉・岡陽一郎・黒嶋敏・飯村均・藤本頼人・鈴木沙織・田中信司・鈴木弘太・福原圭一・植木朝子・柴佳世乃・山口博之・堅月基・中澤克昭共著、『中世人の軌跡を歩く』、394(pp.363-389)、持明院基春考 - 公家の家業と『尊卑分脈』の注記、高志書院、2014年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中本 大(NAKAMOTO Dai)  
立命館大学・文学部・教授  
研究者番号: 70273555

(2) 研究分担者

金 賛會(KIM Chan Hoe)  
立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・教授  
研究者番号: 00331124

二本松 泰子(NIHONMATSU Yasuko)  
長野県短期大学・多文化コミュニケーション学科・准教授  
研究者番号：30449532

山本 一(YAMAMOTO Hajime)  
金沢大学・学校教育系・教授  
研究者番号：40158291

中澤 克昭(NAKAZAWA Katsuaki)  
上智大学・文学部・准教授  
研究者番号：70332020